

『和漢三才図絵』の「朝鮮国語」について (研究ノート)

宣 憲 洋

I 中世朝鮮語語頭子音群

朝鮮語学者河野六郎はその著書「朝鮮語の系統と歴史」の中で、朝鮮語の語頭子音群について次の様に記している。

「一方構造の面では朝鮮語は他のアルタイ諸語とは極めてよく似ている。まず音韻から言うと、語頭に複子音が立たないという特徴は共通する。もっとも朝鮮語に関していえば現代語では正にその通りであるが、中期語の文献の標記には一寸問題がある。というのは、朝鮮の文字の出来た直後の中期語(MK)の文献には sk-, st-, sp- の様な語頭子音や更に psk-, pst- の様なものも出て来るからである。これらの標記が果たして文字通り複頭子音を表したものであるのか、それとも今日なお解明できない発音機構があつて、それをこの様に表したのか、或いはこれらは発音の表示ではなく、形態音素論的な考慮によってかく書かれたものであるのか、判明しないのである。いずれにせよ、これらの標記を持つ語は現代語(NK.)では原則的にいわゆる「濃音」で発音されている(例: MK. pstai '時') (NK. ttä)。なお、アルタイ諸語の語頭子音についての著しい共通点として r 音が現れないということがあげられるが、この特徴は朝鮮語にも該当するし、日本語でもその固有語には見られない」¹⁾

また、韓国の著名な国語学者李基文もこの問題に関し、著書『国語音韻史研究』に語頭子音群という章を設け「訓民正音解例(合字解)に“初声二字三字合用並書如諺語 sta 為地 pck 為隻 pskim 為隙之類”とある。合用並書²⁾の三系列中で一例ずつ見せたものである。実際中世文献には(1)'s'系(sk, st, sp) (2)'p'系(pt, ps, pc, pth) (3)'ps'系(psk, pst)等が使用された。これら並書を持った単語は現代語ではすべて濃音として現れるが、このように多様に表記されたのは何を意味するのか。これは国語音韻史における最も大きな疑問の一つになっている。

合用並書が格別に注目を引く理由としてはこれらが奇異だということの外に、次の二つを挙げることができる。

第一、これは現代綴字法で濃音表記をどのようにすべきかという問題と関連している。各自並書³⁾を選ぶべきことを主張した側はその歴史的正当性を打ち出すために合用並書は文字そのままの子音群であったことを明らかにしようと努力した。

第二、仮にこれらが語頭子音群を表すのなら、これはアルタイ諸語の共通特徴に反するという事実であった。語頭子音群を知らないというのがアルタイ諸語の共通特徴の一つと指摘されてきたのである。

合用並書は文字そのままの子音群を表すと見るのが原則であろう。訓民正音創制当初の表記法は文字と音素の非常に忠実な対応を見せてくれている。他の全ての場合この対応を認めながらも語頭合用並書の場合にのみこれを認めないというのは穏当な扱いとは言い難いであろう。非常に特異な例として龍飛御天歌の女眞語地名表記に'ninchkhuəsi'(総出闊失)があるが、この表記に現れた'chkh'は合用並書の基本性格を良く見せてくれている。

ところで我々は先に's'系並書を濃音の表記と推定したことがある。これは's'の特殊性による

ものであった。‘s’系で得たこの結論は‘p’系と‘ps’系の本質を明らかにするためにも原則論を打ち出すことだけでは足りず綿密な証明がなされねばならないことを感じさせる。

先ず‘p’系について考察することにする。結論から言うならこれらは表記そのままの子音群を表したものと信じられる。その重要な証拠を挙げるなら次のようである。

‘ps, pt, pc’で表記された単語の‘p’が現代語にまでその痕跡を残しているのは早くから指摘されたところである。

例えば現代語の‘ip-ssal’, ‘cop-ssal’等は中世語文献では‘ni-psal(杜詩諺解 7.38), co-psal(杜詩諺解 15-5) (-は別綴りを示す。—引用者注)と表記されたもので‘psal’(米)の‘p’が発音されたと思わずには現代語の合成語に現れる‘p’を説明できない。‘ip-ccak, cəp-ccak’, ‘oip-ssi, pyəp-ssi’等の‘p’も中世語の‘pcak’, ‘psi’等の‘p’が化石化したものと見るときに合理的に説明できる。‘purip-ttita’, ‘huip-ssilta’の場合もそれぞれ中世文献の‘pti-’(開), ‘psi-’(掃)等の‘p’の痕跡を見せている。

音韻変化が起こった後にもその痕跡が形態音素論的現象で残るということは最近になって新たに認識されている事実の一つである。中世語の‘ps, pt, pc’が濃音化した後にもこれら子音群の化石が合成語の中に残っているのはこのような事実の例として非常に興味深いものである。

上に挙げた‘psal’(米)は鷄林類事に‘菩薩’と表記されている。白米曰漢菩薩, 粟曰田菩薩。母音の再構が確実ではないが, ‘菩薩’を*‘pʌsal’と読むならこれと‘psal’の対応は明白になる。そして第一音節の母音の脱落で語頭子音群の形成されたことを教えてくれる⁴⁾としている。

このように朝鮮語における語頭子音群の存在如何は朝鮮語の系統論にも関わる重要な問題である。

ところで、これら語頭子音群の実際上の発音はどのようなものであったのだろうか。河野六郎の言うように「今日なお解明されない発音機構があつて、それをこのように表したのか」あるいは李基文の言うように「文字そのままの子音群を表す」と見るべきであろうか。

この問題の解明のため江戸地代に大阪の医師寺島良安が著した『和漢三才図会』⁵⁾所載の112の朝鮮語語彙を検討することにしたい。

II 『和漢三才図会』所載「朝鮮国語」⁵⁾

項目漢字の意味と括弧内の漢字表記音から朝鮮語音を推定しアルファベットで漢字表記音の横に書く。次にこれが現在の標準語と異なるときは現在標準語を[]内に、原音が方言として残されている場合は< >内にその地名を書くことにする。一部の筆者注を《 》内に記した。

項目の朝鮮語音表記には『訓蒙字會』, 東洋学叢書第一輯, 檀大出版部, 1983年を参照し, 方言については金亨奎, 『韓国方言研究』, ソウル大学出版部, 1983年を参照した。

ただし, 『訓蒙字會』は朝鮮朝中宗22年(1527)に著作されたものであるので, 「朝鮮国語」が著された時期とは約二百年のずれがある。

「朝鮮国語」

1. 天(波乃留) hanəl <慶北, 慶南>, [hani:l]
2. 地(須太具) stang 《ただし, 『訓蒙字會』ではstaとなっている》。[ttang]
3. 日(伊留) il. 《漢字「日」の音》
4. 月(於留) wəl 《漢字「月」の音》

5. 星 (倍留) pyəl, 6. 雲 (久留無) kurim, 7. 風 (波良牟) param
 8. 雨 (比) pi, 《() 内の表記は (比°) とすべきところ半濁音表示の “ ” が漏れたものと思われる》
 9. 雪 (奴牟) nun, 10. 霜 (曾留) səri
 11. 露 (乎留) 《əl, 動詞 əlta (凍る) の語幹》, [isił]
 12. 雷 (波乃留字牟太) hanəl unta, 《「天鳴る」という意味の単文》。[ure], [chən-tung]
 13. 氷 (於呂牟) ərim, 14. 山 (毛恵) moi, [san]
 15. 坂 (古加伊) kokai
 16. 海 (波太具) patang <慶南>, [pata]
 17. 川 (加具) kang, 18. 波 (古留) kəl, [kyəl]. 19. 水 (不留) m^bul, [mul]
 20. 火 (布留) pul
 21. 土 (不留) həl <慶北>, [hilk], 22. 木 (奈牟) namu
 23. 草 (曾) cho 《漢字「草」の音》, 24. 松 (曾奈牟) sonamu
 25. 竹 (太伊) tai, 26. 梅 (波伊波以) m^baihwa, [maihwa], 27. 菊 (久久) kuk
 28. 葱 (波°) pha, 29. 人參 (伊牟曾牟) insəm, 30. 煙草 (太牟婆古) tambako, [tampai]
 31. 麦 (保利) porı, 32. 米 (比° 佐留) psal, 33. 大豆 (古久) khong
 34. 小豆 (波°豆) phat^h, 35. 飯 (波備) pap (-i), [pap], 36. 酒 (須留) sul
 37. 塩 (曾久無) sokim,
 38. 未醬 (知也木) cang, 39. 菓 (也久) yak
 40. 寺 (泥留) tyəl 《口蓋化されていない》, [cəl], 41. 船 (波伊) pai
 42. 家 (知不) cip, 43. 筵 (座里) cari, 44. 外 (之宇天伊) 不明
 45. 筆 (不豆) put, 46. 墨 (保久) m^bək, 47. 杖 (南牟太伊) namutai
 48. 扇子 (武豆曾伊) putsəi? [puchai], 49. 傘 (宇佐牟) usan
 50. 弓 (波利) hwal, 51. 矢 (波利太伊) hwaltai, [hwasal]
 52. 茶碗 (知由具婆利) t^hukupari <慶北>, [ttukpaiki]
 53. 銀 (宇牟) in, 54. 酒杯 (座牟) can, 55. 紙 (知与保伊) cohı (i?) <慶北>, [cong-i]
 56. 仏 (不豆低) puttəi, 《口蓋化されていない》, [puchə], 57. 僧 (知由具) cung
 58. 士 (保波牟) hopan 《虎班, つまり武班のこと》, [səpan] もしくは [mupan]
 59. 農夫 (波久世岐) paiksəng-i, 《百姓》, [nongpu]
 60. 男 (奈牟左宇) namca (u?) 《男子の音》, [namca]
 61. 女 (加牟奈閉) kannahəi, <慶北>, 62. 君 (久牟) kun, 63. 臣 (知与乃牟) congnom? [sinha]
 64. 父 (阿婆美) apa 《慶北》に接尾辞 -m, 更に -i が付いた形か。
 65. 母 (乎由美) əməni, 《「由」は「母」の誤記であろう。》 66. 親 (於婆伊) əpəi
 67. 子 (阿止留) atil, 68. 兄 (閉岐) hyəng (-i), 69. 弟 (阿之) asi <全南>, [au]
 70. 商人 (知也久曾) [cangsu], 71. 牛 (之与) syo, [so], 72. 馬 (毛留) məl, [mal],
 73. 犬 (加伊) kai, 74. 虎 (保牟) pəm, 75. 猫 (古伊) koi, <忠南・全北> [koyang-i]
 76. 鶴 (久波久知) hak 《-chi?》, [hak], 77. 鷹 (末伊) mai
 78. 鳧 (加末久以) kkamakui 《鳥》(見出し語は鴨の意), 79. 鷄 (止留木) talki, [talk]
 80. 鳥 (止里) tori? 不明, 81. 鳩 (以不知) ipuci?, 不明 [pidilki], 82. 魚 (古木) koki,
 83. 鯉 (里賀伊) ringə (-i), [ingə], 84. 烏賊 (乎曾賀伊) ocingə (-i), [ocingə]

85. 鮒 (布賀伊) pungə(-i), 86. 海鯧 (女知古木) myəlchi-koki, [myəlchi],
 87. 鯛 (止牟) tomi, 88. 大口魚 (太伊古) taiko, [taiku],
 89. 蛇 (佐牟無須伊) 不明, [paim], 90. 蚊 (保留) pəl. 《pəl は蜂の意》,
 91. 衣 (乎須) os⁷, [os], 92. 沙綾 (阿之知里) 《不明》,
 93. 綸子 (豆具) 不明, 94. 紬 (女具知由) myəngcu, 95. 糸 (之留) sil,
 96. 木綿 (牟女具) mummyəng, 97. 綿 (女具曾) myəngso (m)?, [som],
 98. 灯 (止具) ting, 99. 湯 (止乎無布留) təun m^bul < təun mul,
 100. 一 (波牟奈) hanna, [hana], 101. 二 (止乎留) tul, 102. 三 (曾伊) səi, [ses],
 102. 四 (止伊) n^dəi, [nes], 104. 五 (大曾) tasə, [tasəs],
 105. 六 (与曾) yəsə, [yəsəs], 106. 七 (知留古布) n^dilkop, [ilkop],
 107. 八 (与止留具) yədəlp, 《「具」は「布」の誤記であろう》
 108. 九 (阿保布) ahop, 109. 十 (惠留) yel < yəl, 110. 百 (以留婆久) ilpaik [一百],
 111. 千 (以留天牟) ilthyən 《一千》, [ilchən],
 112. 万 (以留末牟) ilman 《一万》

III むすび

これらの語彙はどのように集められたものだろうか。出典について何も書かれていないので推測の域を出ないが、この書が執筆されたであろう時期に二度に亘る朝鮮通信使の来訪 (1682 年と 1711 年) があったことと恐らく無関係ではないものと思われる。

また、この朝鮮通信使に幕府の儒者として応接した林信篤が「和漢三才図絵略序」なる序文を呈していることから見て、彼を仲立ちにして寺島良安が通信使一行の誰かに会って直接聞き取った可能性も否定できない。

更に、'm^bul', 'n^dəi', 'n^dilkop' などで出渡りの 'b', 'd' を聞き取って表記している点などを考慮すると、これらの単語は伝聞や書物によったのではなく著者が直接原音を聞き取り忠実に表記したと考えられる。

以上の単語等の中で 2. 「地 (須太具)」, 32. 「米 (比^o 佐留)」の 2 語に注目したい。

これらはそれぞれ stang, psal を朝鮮通信使ないしその随員から寺島良安自身が直接聞き取り、括弧内の漢字に転写したものであろう。

このことから語頭子音群は当時、実際に正しく文字通り発音されていたものと思われる。

なお、語頭子音群 'st' については菅野裕臣が岩波文庫版『海東諸国紀』付載の「言語資料としての『海東諸国紀』」の中で琉球語「朝」のハングル表記 sto-mati の例をあげ、音節の頭の st は二つの子音として発音されたと指摘している⁸⁾。

(注)

- (1) 河野六郎, 朝鮮語の系統と歴史, 『河野六郎著作集』第 1 巻, 1979 年, 平凡社, 80-81 ページ。
- (2) 合用並書とは異なる子音字を二つもしくは三つ並べて書くことを言う。例えば sk, ps, lk, や psk, pst 等。
- (3) 各自並書とは同じ子音字を並べて書くこと。例えば kk, tt, pp, ss 等。
- (4) 李基文, 『国語音韻史研究』, 国語学叢書 3, 三版, 塔出版社, ソウル, 1980 年, 56-57 ページ。
- (5) 江戸地代に大阪の医師寺島良安 (1654? -1732?) が中国の〈三才図会〉にならい, 和漢古近の事物を天文・

『和漢三才図絵』の「朝鮮国語」について

地理・器具等に分類し、図入り漢文体で解説・考証を加え著した言わば百科辞書。正徳2年（1712年）の自序がある。112の朝鮮語の語彙（単語・単文）が収録されている。

- (6) 島田勇雄他訳注, 『和漢三才図絵』, 東洋文庫3, 1987年, 255-256ページ。
- (7) 's' が内破音化していないことに注目したいが, 方言的特徴かも知れない。
- (8) 田中健夫訳注, 『海東諸国紀』, 岩波文庫, 岩波書店, 439ページ。